

© ACG プレスリリース

— 展覧会開催のご案内 —

野村仁「宇宙開闢年表」 Hitoshi Nomura: The History of Space-Time

Cosmic Sensibility が成し遂げた3つのステージ 又は 限りなく遠い記憶

アートコートギャラリーでは、野村仁の新作個展「宇宙開闢年表」を開催します。

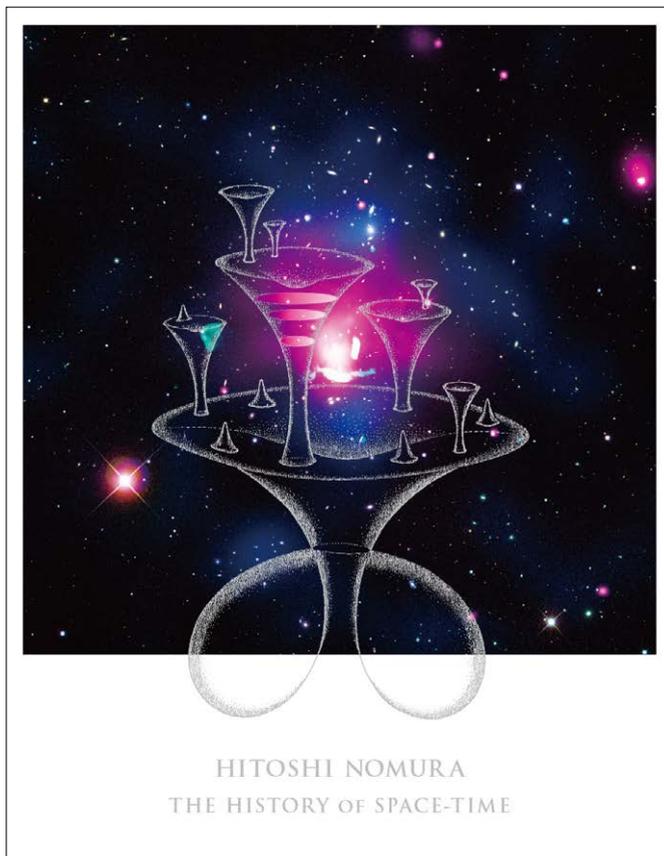
物体に“時の経過”を見る独自の視点を持ち、コンセプチュアルな自然との対話を通して、彫刻表現の新たな世界と可能性を追求し続ける野村仁。写真を主な制作手法とし、物体の運動や宇宙の秩序をカメラで捉える一方、野村はしばしば隕石やDNA、古生代の植物化石を用いて、“生命”や“宇宙の起源”にスポットライトを当てた作品を手掛けてきました。

本展では、ビッグバン宇宙論により138億年前といわれる宇宙誕生から人類誕生に至るまでの地(球)史の中で、野村が最も重要であると考えられる3つの出来事を取り上げ、それぞれの時間、光、現象などに関連し制作された作品約25点を一斉に展示します。

<3つの出来事(ステージ)> *宇宙誕生を0(ゼロ)年として

- ・ 103億年 — 光合成始まる
- ・ 134億年 — 植物の上陸
- ・ 138億年 — ヒト出現

天体の光と地上の時間をテーマとした昨年の展覧会に続き、今回は宇宙の光が生まれた時空間と地球上の生命とのつながりについて、野村は時代ごとに年表化するという画期的な展開を試みます。また、本展初日には、植物化石の専門家である塚腰実氏をゲストにお迎えしてトークイベントを企画。太古の地層から発掘された化石と、深宇宙の光を捉えた銀河写真から見えてくる、自然と人間のエネルギーと美の世界に迫ります。



野村仁「宇宙開闢年表」

Courtesy of NASA/CXC/Univ of Hamburg/F. de Gasperin et al, SDSS, NRAO/VLA.

【展覧会概要】

展覧会名: 野村仁「宇宙開闢年表」 Cosmic Sensibility が成し遂げた3つのステージ 又は 限りなく遠い記憶

Hitoshi Nomura: The History of Space-Time 3 Stages Accomplished by Cosmic Sensibility, or Infinitely Distant Memories

会期: 2018年2月17日[土] - 3月17日[土] *日・月休廊

会場: アートコートギャラリー 〒530-0042 大阪市北区天満橋1-8-5 OAPアートコート1F

開廊時間: 11:00-19:00 [土曜日-17:00]

◆ 関連イベント 2017年2月17日[土]

14:00 - 16:00 トークイベント「陸に上がった植物のあゆみ」

[ゲスト: 塚腰実(大阪市立自然史博物館 主任学芸員) / 聞き手: 楠本愛(国立国際美術館 研究補佐員)]

16:00 - 17:00 レセプション

*トークは要予約 (Email: info@artcourtgallery.com または TEL: 06-6354-5444) *ともに参加費無料

◆ 展示テーマと《出展作品》 *《 》各シリーズタイトル

103億年 — 光合成の海と銀河レンズ ... 《Stromatoliteの化石と銀河の光》

134億年 — DNA上陸と銀河光 ... 《一枝の化石と銀河の光》

138億年 — 可視光とBlack Hole ... 《Chromatist Painting》《草叢にBlack Holeが...》

主催: アートコートギャラリー(株式会社八木アートマネジメント) | 協賛: 三菱地所株式会社、三菱マテリアル株式会社、三菱地所プロパティマネジメント株式会社

【お問い合わせ】アートコートギャラリー [担当: 大場] ※ビジュアル資料ご希望の方は、お気軽にお問い合わせ下さい。

〒530-0042 大阪市北区天満橋 1-8-5 OAPアートコート1F TEL:06-6354-5444 FAX:06-6354-5449 E-mail:info@artcourtgallery.com www.artcourtgallery.com

◎ ACG プレスリリース

野村仁 Hitoshi Nomura

- 1945 兵庫県に生まれる
- 1967 京都市立美術大学卒業
- 1969 京都市立美術大学専攻科修了

【主な活動】*2009年まで

- 1969 3月、「美大作品展」(京都市美術館)にて、段ボールが自重によって崩れていく作品《Tardiology》を発表。
10月、「第2回現代の造形〈野外造形'69〉」(鴨川公園、京都)に、ドライアイスが昇華する過程を提示する作品《Dryice》を出品。
- 1970 3月、「京都アンデパンダン展」(京都市美術館)に、写真作品《Dryice: 1969》と《道路上の日時》を出品。
5月、中原佑介が総コミッショナーをつとめた「第10回日本国際美術展—人間と物質」(東京都美術館)に参加。
- 1972 1月、《カメラを手に持ち腕を回す: 人物、風景》《重心の移動》を撮る。(16mm フィルム)
3月、16mmムービーカメラを使って「見るもの全てを写したい」と思い、《photobook又は視覚のブラウン運動》の撮影を開始。(—1982年2月)
- 1975 《age: M→F》写真作品を制作。(’78ビデオ作品を制作)
電線の向こうに見える月が音符のように見えたことがきっかけで、《‘moon’ score》の撮影を開始。
以後、『月』‘moon’ score、『星』‘pleiades’ score(’78—)、『鳥』‘birds’ score(’83—)、『鶴』‘Grus’ score(’04—)を開始。
- 1978 10月、太陽を対象とした最初の作品を制作。
12月、《The Earth Rotation》(自転する地球)の撮影を開始。(—1979年11月)
- 1979 11月、LP《‘moon’ score》(h v / 001)をリリース。
- 1980 3月、魚眼レンズを用いて太陽の一日の軌跡を記録した《曲がった大気中の自転》の撮影を開始。(—1988年12月)
- 1982 3月、「第5回インド・トリエンナーレ」(ニューデリー)に参加後、釈迦ゆかりの地を巡礼する。
《北緯35度の太陽》の写真撮影を開始。(完成は1987年)
- 1983 5月、バッハのチェロ組曲の写譜を見た折、「鳥が飛んでいる」と感じ、五線譜を写し込んだフィルムで鳥を撮影する作品《‘birds’ score》の制作を開始する(—現在)。
11月、隕石を初めて入手する。そのかたちが面壁の達磨と衣を広げ風に向かって歩く釈迦に見えたことから、宇宙の造形力の不思議に思い至り、これを「コスミック・センシビリティ」と呼んで、以後、作品に隕石を使用するようになる。
- 1984 星や太陽と那智の滝の写真撮影するため、いく度か熊野に通い、《自転と重力》などの作品を制作する。(那智の滝の撮影は1982—)
- 1985 太陽を撮影中に、正午になっても避雷針の影が真北に落ちないことに気づき、太陽の南中時刻にずれがあることを体験的に理解する。これが太陽が天球上を一周するのに要する時間が正確には24時間ではないために生じる、「均時差」と呼ばれるずれであることを知り、同時刻における1年間の太陽の位置の変化を記録した《アナレンマ》のシリーズを制作するきっかけとなる。
- 1988 2月、「野村仁+村田千秋 2つの個展—温度は基本か」(ABCギャラリー、大阪)に、液体酸素と液体窒素を使った作品《時間の矢: 酸素 — 183度》《時間の矢: 窒素 — 196度》を発表する。
10月、20年近く勤務した放送局を退職し、京都市立芸術大学助教授に就任する。(’99年教授、2000年大学院教授)
- 1989 9月、CD《‘moon’ score》(h v / 010)をリリースする。
- 1991 5月、CD《‘pleiades’ score》(h v / 011)をリリースする。
- 1992 12月、オーストラリアを訪れ、ハメルンプールにてストロマトライトを撮影する(9—25日)。太古の光景を目の当たりにし、物質と生命を貫くにか大切なものがあるのではないかと考える契機になる。
- 1993 5月、ソーラー・パワー・ラボ(SPL)を設立し、以後、毎年ソーラーカーを制作する。(—’99年)
- 1994 12月、CD《‘birds’ score》(h v / 100)をリリースする。
- 1995 5月、ソーラーカーで走行予定のアメリカ西部の大地を飛行機から撮影する。
- 1999 7月、SPLのメンバー10名とともに、《HAASプロジェクト—ソーラーカーによるアメリカ大陸横断をを実施する》。(7月15日—9月4日)
- 2000 1月、スペース・シャトル(STS-99)のシャトル・レーダー・トポグラフィ・ミッション(SRTM)に呼応して、《スペース・シャトル+大文字プロジェクト》を遂行する。
- 2002 3月、アナレンマ観測装置の製作にとりかかる。
8月、NASA(現JAXA)との共同研究として、NASAの見学と日本人宇宙飛行士(野口、若田、向井、土井)のインタビューに参加する。
- 2003 5月、《Octopusic Conversation: Chromatist》を開始する。
7月、4年間(閏年)の太陽の動きを確認するため、アナレンマの撮影を継続する。(—現在)
9月、《Elliptic score: In Falling》において五重の楕円を五線譜として使用し、DVDを製作する。
- 2004 1月、鹿児島県出水水平野にて鶴を撮影、その大きさと生命力に圧倒される。
- 2006 8月、JAXAの「ISS/きぼうの文化・人文社会科学利用パイロットミッション」に「光るニューロン: ニューロンにヒットする宇宙線」と「‘moon’ score: ISS Astronaut」が採択される。
- 2006 10月、CD《‘Grus’ score》(h v / 110)をリリースする。
- 2007 7月、動物に先駆け上陸をはたした古生代の植物に魅かれてきたが、偶然、陸上植物の祖先シャジクモを採取する。
9月、植物の生育が光の各波長と深く結びついている点に着目し、企画「Chrono & Chroma」(アートコートギャラリー、大阪)において《植物はクロマティスト、出現以来止むことなく》を発表する。
- 2009 4月、若田光一宇宙飛行士によってJEMの窓から《‘moon’ score: ISS Astronaut》の「月」が撮影される。

◎ ACG プレスリリース

【主な個展】

- 1970 「昇華する沃素と時刻表」ギャラリー16、京都
 1972 「重心の移動」ギャラリー16、京都
 1977 「‘moon’ score & 日本列島」ギャラリー16、京都
 1978 「‘moon’ score & 8 discs」コバヤシ画廊、東京
 1987 「近作展2・野村仁 Spin & Gravity」国立国際美術館、吹田
 1989 「Cosmo Chronography」INAX ギャラリー、東京
 1991 「Cosmo Chronography & Phonography」ギャラリーKURANUKI、大阪
 1993 「CRYO PHENOMENA」アートギャラリー・アルティアム、福岡
 1995 「CHANGE over TIME」スパイラルガーデン、東京
 「CHRONOSCORE」東京都写真美術館、東京
 1996 「CHRONON & PROTOMORPH」中京大学 C・スクエア、名古屋
 「Cosmic Sensibility が作用して・・・」ギャラリーKURANUKI、大阪
 「Soft Landing Meteor & DNA」ギャラリーGAN、東京
 1998 「One with the Cosmos」ギャラリーKURANUKI、大阪
 1999 「Mission to America & Jurassic Giant Tree in Tokyo」ギャラリーGAN、東京
 2000 「New Vision Navigator—ソーラーカーによるアメリカ大陸横断記録—」中京大学C・スクエア、名古屋／京都芸術センター、京都
 「野村仁—生命の起源：宇宙・太陽・DNA—」水戸芸術館現代美術センター、水戸
 2001 「野村仁—移行／反照—」豊田市美術館、豊田
 2004 「新作展—chroma & chromatic—」アートコートギャラリー、大阪
 2006 「Hitoshi Nomura—An Introduction, Photo works 1975-92—」MaCaffrey Fine Art、ニューヨーク
 「野村仁—Cosmo—Arbor—」アートコートギャラリー、大阪
 2007 「Hitoshi Nomura: Chrono & Chroma」アートコートギャラリー、大阪
 2008 「Hitoshi Nomura: Gravitational Shape & Flavor—The Sun, Meteorites and The Body—」アートコートギャラリー、大阪
 2009 「野村仁：変化する相—時・場・身体」新国立美術館、東京
 「野村仁退任記念展：View From Space, From Here On...」アートコートギャラリー、大阪
 2010 「Hitoshi Nomura: Marking Time」MaCaffrey Fine Art、ニューヨーク
 2012 「Discover Hitoshi Nomura In Hong Kong」Gallery 27、香港
 2013 「野村仁：身体／知覚 又は 私を「私」とおもう私」アートコートギャラリー、大阪
 2015 「Hitoshi Nomura: Contingency and Necessity [野村仁：偶然と必然]」MaCaffrey Fine Art、ニューヨーク
 2017 「野村仁：光と地の時間」アートコートギャラリー、大阪

【近年の主なグループ展】

- 2003 「The History of Japanese Photography」The Museum of Fine Art, Houston、ヒューストン 他
 「盗まれた自然」川村記念美術館、佐倉
 2004 「痕跡—戦後美術における身体と思考—」京都国立近代美術館、京都／東京国立近代美術館、東京
 2005 「アート&テクノロジーの過去と未来」ICC、東京
 「もの派—再考」国立国際美術館、大阪
 2006 「美術館は白亜紀の夢を見る」埼玉県立近代美術館、埼玉
 2007 「非芸術反芸術芸術」Getty Research Institute、ロサンゼルス
 「宇宙御絵図」豊田市美術館、豊田
 2009 「ビデオを待ちながら—映像、60年代から今日へ—」東京国立近代美術館、東京
 「Enokura, Nomura, Takamatsu: Photographs 1968-1979」McCaffrey Fine Art、ニューヨーク
 「医学と芸術展—生命と愛の未来を探る：ダ・ヴィンチ、応挙、デミアン・ハースト」森美術館、東京
 2011 「Hitoshi Nomura, Sigmar Polke, Yukinori Yanagi: Works in Progress」McCaffrey Fine Art、ニューヨーク
 2013 「Re: Quest —1970年代以降の日本現代美術」ソウル大学校美術館、ソウル
 2015 「Re: play 1972 / 2015—『映像表現’72』展、再演」東京国立近代美術館、東京
 2016 「ART1 2016: Stepping into Fresh Snow」アートコートギャラリー、大阪
 2016-17 「宇宙と芸術展 かぐや姫、ダ・ヴィンチ、チームラボ」森美術館、東京／ArtScience Museum、シンガポール
 2017 「アッセンブリッジ・ナゴヤ 2017」港まちポットラックビル、名古屋
 「態度が形になるとき—安齋重男による日本の70年代美術—」国立国際美術館、大阪
 「JAPANORAMA — New Vision on Art Since 1970」ポンピドゥー・センター・メッス、メッス

【主な作品収蔵】

北九州市立美術館／岐阜県美術館／京都国立近代美術館／京都市美術館／国立国際美術館／埼玉県立近代美術館／滋賀県立近代美術館／
 千葉県美術館／東京国立近代美術館／栃木県立近代美術館／姫路市立美術館／兵庫県立美術館／広島市現代美術館／目黒区美術館／
 和歌山県立近代美術館／Dallas Museum of Art／Getty Research Institute／International Center of Photography／Musée d'Art Moderne
 Saint-Étienne／Museum of Modern Art, New York／San Francisco Museum of Modern Art